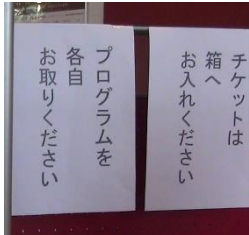


## ♪ウインドバスカース埼玉アコーディオングループ 第12回定期演奏会♪

「風たちのラブソディ」～私たちは風、自由な風～

2021年5月22日（土）開演13：30 さいたま市プラザノース・ホール

開演に先立ち、司会から「会場では必ずマスクをして欲しい」、「受付でのプログラムの手渡しは行わないので各自自由にとること」、「場内での歓談は出来るだけ控えること」、「消毒液を用意してあるのでこまめに手指の消毒を行うこと」、「演奏後の声掛けはしない、拍手で表現して欲しい」など感染防止対策へ協力の言葉かけがあった。



受付前の来場者に手指の消毒をして回るスタッフ。(写真上)

←(写真右)客席は、定員の50%のため座席は1つ置きに座るように表示してあった。

演奏会は満席（50%）状態で開演となりました。プログラムは3部構成で途中2回休憩があります。以下、プログラム順に紹介してみます。

### 《第1部》～私たちは風 自由な風！～

アコーディオンの曲と言えばタンゴをイメージするのではないかと、アコーディオン四重奏による「夜のタンゴ」で開幕です。

2曲目からはソロが3人続きます。

最初の方の演奏曲は「涙の流るるままに」歌劇「リナルド」より（ヘンデル作曲）フリーベースによる初めての挑戦とのことです。

舞台に置かれた台を覆い隠すように黒い布がかぶせてあり、その椅子代わりの台に腰掛けての演奏です。舞台監督も務める松永氏の細やかな気遣いで、この演奏会での独奏は皆さんこの椅子で演奏される演出なのかなと思って見ていたら、以降の独奏者の椅子は通常のパイプ椅子でしたので、単に演奏者の思いだったのでしょうか。見た目には不安定に見えたけれども演奏者の衣装とのバランスも良く面白い使い方だと思いました。

ソロ二人目の演奏曲は、アストル・ピアソラ作曲「Tanti anni prima(Ava Maria)祈りのような静かに流れるメロディーがとてもきれいです。弱い音でもしっかり会場に伝わっていました。ピアソラの曲にこのようなやわらかい曲があるのを初めて知りました。

三人目もピアソラの曲で「ブエノスアイレスの春」です。「Ava Maria」とは正反対に意欲的な曲です。暗譜で演奏されたのはさすがで伸びのある演奏でした。

第1部の最後はアコーディオンアンサンブル、君をのせて『天空の城ラピュタ』より。編成は、アコーディオン11名、他にV.アコーディオン（丸茂睦）ピアノ（鶴原裕子）打楽器（佐藤一人）編曲・指揮：松永勇次

・・・換気のため5分間の休憩（そのまま席で待つようアナウンス）・・・

## 《第2部》 Anyway the wind blows ・・・

～風は吹くよきっと、僕のこの思い受け止めて～（ボヘミアン・ラブソディーより）

最初のソロは、ジャン・ポール・マルティーニ作曲「愛の喜び」筆者は初めて聴く曲です。フリーベースなのでしょうか、きれいな曲で途中から明るくテンポが少し早くなるのも素敵です。

二人目のソロは、フィンランド民謡「サッキヤルベンポルカとバリエーション」テンポも早くなったりたつぷりだったり、表現（編曲）の難しい曲ですね。バリエーションの方はさらに難解で難しそうだなあと感心して聴いていました。一緒に聴きに行った方も好評価をしていました。

次の曲は C.チャプリン作曲「モダン・ディージー・タイムス」編曲・指揮：松永勇次。途中に「東京ラブソディ」を入れたりちょっとジャズ風にしたリ、哀愁を帯びた旋律から「エターナリー」へと曲の構成やアレンジがとても楽しくアンサンブルの魅力をたっぷり楽しめました。最終小節の手拍子には、このような指揮もあるのかと一瞬びっくり。客席から笑い声が上がった。



「モダン・ディージー・タイムス」の様子（主催者提供）

第2部の最後はアコーディオン オーケストラとソロボーカル。

「ボヘミアン・ラブソディー・ミニアチュール」と「ウィ・ウィル・ロック・ユー」の2曲。作詞・作曲：フレディ・マーキュリー 編曲：松永勇次 日本語訳詞：添島礼子・松永勇次 指揮：松永勇次  
構成：アコーディオン（13名）V.アコ/丸茂睦 ボーカル/大熊啓 ピアノ/鶴原裕子 打楽器/佐藤一人

アコーディオン演奏者は紫色の布を首に巻いてたらしした格好で入場。

1曲目の「ボヘミアン・ラブソディー・ミニアチュール」はイギリスのロックバンド「クイーン」の曲で、映画を見た松永勇次氏が情熱的に曲を作り、歌う主人公フレディの姿を気に入りこれをアコーディオンで弾きたいと編曲したそうです。アカペラからロックまで形式にとらわれない曲とのこと。2曲とも初めて聴く曲でした。ボーカルの大熊啓は黒いランニングシャツ姿で登場。8小節ほどの前奏の後すぐ歌が入ります。松永氏が観たという映画の中で歌うフレディの姿を思い描きながら聴きました。

2曲目の「ウィ・ウィル・ロック・ユー」は会場も手拍子で応えて盛り上がり「一緒に聴きに行った仲間が、『コロナ禍の中マスク無しであんな声量で歌って大丈夫なのかね』と心配するほどの熱唱です。

この曲に限ったことではないけれど、松永氏がリズムを大切にしていることがよく分かる舞台でした。

・・・換気・トイレ休憩のため 10 分間休憩（戻る際同じ席に座るようアナウンス）・・・

### 《第 3 部》～風の翼にのって 故郷まで飛んでいけ、祖国の歌よ

自由にお前を口ずさんだあの故郷へ 気ままにお前と過ごしたあの故郷へ～  
（ポロヴェツ人の踊りより）

◇第 3 部の最初はゲスト演奏◇ソプラノ独唱 ソプラノ：桑原キャサリン ピアノ：  
コジヤ美奈 F.F.ショパン作曲「So Deep is The Night」（別れの曲）

この別れの曲は、桑原キャサリンさんが中学生の時におばあさんから頂いたアコーディオンで演奏した思い出の曲、と紹介していました。良く知られた曲ですけれどアコーディオンでも聴いてみたくなりました。

次はアコーディオン オーケストラと独唱で「アヴェ マリア」—歌劇カヴァレリア・ルスティカーナ間奏曲— 作曲：ピエトロ・マスカーニ

編曲：松永勇次 作詞：添島礼子 指揮：松永勇次 ソプラノ独唱：桑原キャサリン  
構成：アコーディオン（13名）V.アコーディオン/丸茂睦 ピアノ/鶴原裕子

舞台はイタリア、シチリア島で実際に起きた 2 組の男女の恋愛の悲劇がモデルになっている。とプログラムに紹介されています。服装は上は白、男性は黒のズボンで、女性は緑色のスカートで登場。

第 3 部の最後の曲は—ポロヴェツ人の踊り（ダッタン人の踊り）オペラ《イーゴリ—公》より— 作曲：A.P.ボロディン 編曲：松永勇次 作詞：添島礼子（5 章）  
編成：「アヴェ マリア」演奏メンバー＋バリトン独唱/大熊啓 打楽器/佐藤一人  
ソプラノは赤いドレス、バリトンは上下黒の衣装で登場。（写真は主催者提供）  
このようなアンサンブルができるのがウインドバスカーズの強みです。V.アコーディオンをベースに使っていたのもここでは効果的でした。

永い年数を掛けて日ごろから合唱団とのつながりを築いている中で演奏活動してきたエネルギーが存分に生かされていたと思います。素晴らしい演奏に客席は大きな拍手に包まれました。

そうして、アンコールは、最後の曲の前半、二人の歌唱の入る部分を再演して幕を降ろしました。聴きごたえのある素敵な定期演奏会でした。

背筋を伸ばし元気いっぱい指揮された松永勇次氏の姿もまた印象に残る発表会でした。コロナ禍の中で無事演奏できたことに喜びも大きかったのではないのでしょうか。



—ポロヴェツ人の踊り（ダッタン人の踊り）オペラ《イーゴリ—公》より—演奏の様子